

元四天王寺女短大 大川原千鶴

1. 文楽については浄瑠璃・人形・舞台等各方面で種々研究がなされているが人形の衣裳に関するものは殆んど皆無と云ってよい。その上、古い衣裳は大半焼失しており、僅かに焼け残った衣裳も舞台観賞用にはむかないとの見地から散逸してしまっているので現在公演に使用されている衣裳について調査し体系づけてゆきたいと考えた。

2. 大阪朝日座(旧文楽座)において年4回公演される機会をとらえ出演人形の衣裳について調査を行なった。

3. 文楽に関しては人形の衣裳に関する時代考証は殆んどなされていないようで、一谷嫩軍記をみても小桂姿の玉織姫や保侶を背にした敦盛、鎧直垂の熊谷が袴をつけたり、袖熨斗目で現われる。これから考えられることは題材は平家物語を柱としながら宝暦年間の作であるということが江戸時代に生きた作者の思想・風俗を作品の中に反映しているのであろう。また熊谷の衣裳につけられた紋は「対鳩」になっており熊谷のきまり紋とされているが史実にしたがるなら「鳩に寓生」の紋でなければならぬ。このように衣裳に関して疑問をいだかせる点を多々発見したが独特な衣裳構成をもみることができた。即ち着付（長着のこと）に背明きをこしらえたり、「まち」をつけたり、女物の衽すそをつまんで足にみたてるなど、また綿入れ仕立てを袷、袷を単衣と称するなどもその一例である。